

農事組合法人 紫草の里営農組合（竹田市志土知）

【経営の概要】

経営形態	生産組織（特定農業法人）
モデルの種類	中山間地モデル
設立時期	（総会）平成18年9月28日 （登記）平成18年10月24日
構成戸数	35戸
労働力	基幹5名、補助10名

【経営規模(ha)】

	経営面積	水 稻	麦	大 豆	その他 (紫草他)
			大麦		
平成19年	20.1	10.5	5.9	9.0	0.6
平成20年	20.4	12.6	6.4	7.2	0.6
平成21年	20.8	12.7	5.5	7.4	0.7

【機械装備】

コンバイン（4条）	1台
ブームスプレーヤ	1台
大豆播種機	1台
ロータリー	1台
車載車（2t）	1台



【経営の特徴】

中山間地域で集落の水田面積の50%で利用権を設定し、地域ぐるみで効率的な農業経営を展開している。

「紫色」をテーマとした集落営農にも取り組んでおり、紫草やワレモコウの共同栽培の他ブルーベリーや桑の実ジャム等の加工品づくり、紫根の染色による都市との交流により女性が積極的に参加した地域ぐるみの法人活動が行われている。

【導入した新技術】

◎カラスケールによる施肥調節技術

（現状）19年度から法人で水稻の作付を始めたが、穂肥の施用が管理者により異なった。安定的な収量を確保するため、穂肥の適期、適量施肥が望まれた。

（手法）圃場毎にカラスケールで葉色を判断し、草丈の調査と共に適正な施肥量を決定した。

（結果）圃場毎にカラスケールによる葉色を判断し、施肥量の目安表を作成した。

（留意点）

- ・葉色の目ぞろい会を毎年開催して、担当者の育成をしていく必要がある。
- ・判断する時期（幼穂1cmの頃）の見極めが重要。



◎自脱型コンバインによる収穫



(手法) 機械装備を効率的に活用するため、自脱型コンバインで水稲と麦の2作物の収穫を行い、コストの低減を図った。

(結果) コンバインの利用率が向上し、コストの低減に繋がった。

(留意点)

- ・水稲と麦の適期収穫を行うため、圃場毎の巡回調査を行い、作業の効率化・作物の高品質化を図る必要がある。
- ・同じ機械を使用するため、混入が懸念される。収穫終了後に清掃の徹底、整備点検の徹底が必要である。



◎その他特徴的な取組

新規品目として、ワレモコウと紫草を導入し、経営の安定を図っている。平成21年度は、女性の労働力と農地のさらなる活用を目的に、ちよろぎ・白うり・紅ばなを試験的に作付けし、導入について検討している。

また、理事に女性を2名登用し、女性の参画が進んでいる。

◎主な波及活動

- ・竹田市内の水稲農家・集落営農組織リーダーを集めての播種実演会を実施した。
- ・大分県の土地利用型作物の生産者を集めた直播研修会において、成果発表を行った。
- ・当法人は、園芸品目を取り入れた複合経営と、紫草を通じた交流活動を行っていることから、県内外で注目されている。積極的に視察の受け入れを行い、情報交流を行っている。



【経営状況】

(10aあたり)

	労働時間(県平均比)	全算入生産費(県平均比)	所得
土地利用型	18.0hr (86%)	5.7万円 (119%)	1.5万円
水稲	25.0hr	6.4万円	
麦	6.3hr	4.3万円	
大豆	13.4hr	5.4万円	

(平成20年度データ)